JIA 関東甲信越支部学生デザイン実行委員会
「東京都学生卒業設計コンクールの実施とアーカイブ化」

-Prologue-　候補業績の独自性と教育的アプローチについて

「審査している様だけど僕ら（審査員が）審査されている側になっているのではないか？僕らが学生さんの作品を通してこの時代の評価軸を打ち出せていたか？それが学生の皆さんの参考になり、少しでも皆さんの人生にプラスになっていればよかったと思っています。」

第 29 回　JIA 東京都学生卒業設計コンクール 2020　山梨知彦審査委員長　審査動画より

/アーカイブス　第 29 回審査動画　２次審査 04　55 分 20 秒～/ https://jiatokyodesign.com

○デザインレビューによる*1 建築家教育への貢献

評価軸を定め評価を行う。そして対話を通じて評価軸について議論し共有していく。いつしかその評価軸でさえ一つでないと気づく。そして自らの作品を見つめ、自分の軸を見つけていく。私たちはそれが自らを最も成長させてくれる成長機会であるとその経験から知っている。本取り組みは建築家の職能団体である（公社）日本建築家協会関東甲信越支部学生デザイン実行委員会（以下 JIA）が東京都に所在地を置く全ての大学、専門学校を対象にして 30 年間にわたり実施してきたコンクールとそのアーカイブ化に関する取り組みである。当コンクールは開始当初から国内外の第一線で活躍する建築家がデザインレビューを行い、それをきっかけにして学習者である出展者と審査員、学習者同士の議論を巻き起こし、講評や対話を通じてその評価や考え方を共有することで次世代を担う建築家育成の機会を提供することを目的としている。これは建築家の成長に必要不可欠と考えられる*2 総合力、統合力、*3 デザイン能力などの暗黙知育成を経験学習により行おうとする試みである。同時に「高度の専門技術と芸術的感性に基づく創作行為を行う*1（JIA 建築家憲章より抜粋）」建築家への熟達の一部になることを意識した教育活動である。

○デジタル技術を用いたアーカイブ化による教育的資料の提供による貢献

卒業設計はその教育目標から、多くの学校において自らのテーマを見つけ、それに適した敷地、プログラムを考えるところから始まる。現在、卒業設計に関する体系的にアーカイブ化された出版物、web サイトは存在しない。ゆえに学生たちは単年度で出されている作品集や web サイトなど、散逸している情報を集めるところから卒業設計がはじまる。卒業論文などの研究活動においてもその一歩は同じであるが CiNii や日本建築学会の論文検索サイトなど、デジタル技術を用いたアーカイブスが存在しており、卒業設計でも学習者が容易にアクセス可能にしたいという想いから取り組みがスタートしている。本取り組みは長年にわたり JIA が実施してきた卒業設計コンクールについて、国内で初めて体系的なデジタルアーカイブ化を行うことで建築家教育における重要な科目である卒業設計の教材、資料開発の一歩になればと考えている。特に本コンクールで大切にしてきた「対話を通じて評価の共有」を行うことを記録できるアーカイブ化を目指しており、暗黙知育成のための資料として、その手がかりになることを考えている。

これらの二つに本活動の教育的な独自性があると考えている。またこれらは大きな意味で学校での教育と補い合いながら建築家へ熟達化する学習サイクルを回していく一助となることを意識している。

（1）＿1　候補業績説明１　取り組みについて

①JIA 東京都学生卒業設計コンクール

JIA 学生デザイン実行委員会では 1992 年より都内にある大学を対象とした東京都学生卒業設

*1:本取り組みにおける建築家とは JIA 建築家憲章による。http://www.jia.or.jp/guide/about_jia/kenshou_jia.pdf
*2:UNESCO-UIA 建築教育認定では総合力、統合力育成がうたわれており育成科目として卒業設計、修士設計の重要性が述べられている。
*3：デザイン能力「Design/development of solutions」とは「必ずしも解が一つでない問題に対して種々の学問・技術を利用して実現可能な解を見つけ出していく能力」

計コンクールを開催している。2017 年からは対象を都内の専門学校へも拡げ、現在 30 回を数えており、これまで出展された作品数は 1400 を超える。近年ではせんだいデザインリーグ、赤レンガ卒業設計展、レモン展など展示会・コンクールが数多くあるが、開催当初から建築家が審査を行うコンクールとして実施しており、その先駆け的な存在である。応募作品は大学、専門学校の推薦による学校の代表作品である。本コンクールは建築家による職能団体の委員会により運営されており、審査自体は審査員に一任しているがその開催方法から審査員の選定に至るまでを現役の建築家として要項・進め方・審査員などを決定している。

例年行われている具体的な審査会の運営方法は一次審査、二次審査、最終審査と３段階で行っている。会場では学生が各々の決められた場所に模型やプレゼンボードを配置している。一次審査では全審査員に学生の全作品を見てもらう。学生は回ってきた審査員に対し必ずプレゼンを行ってもらっている。複数回のプレゼンを行うことで学生の教育の場ともなっている。一次審査では審査員が 15 票の持ち票の投票を行う。一次審査で一票でも票が入ったものを一次審査通過作品とし、その中で得票率の高かったものから審査員同士議論を重ね上位 15 作品ほどを最終審査へ進める。この際に得票率は低くても、審査員が話を聞いてみたいと思った作品を推薦し最終審査に残すなどの自由度があり、一人の審査員の推薦で残ってくる学生もいる。最終審査では模型を前に最後のアピールをしてもらう場が設けられている。それを受けてさらに議論を重ね、議論の中から賞を決定していく。全て完全公開審査で行われ、透明性が高い審査を実施している。

②東京都学生卒業設計コンクール　アーカイブス

現在、卒業設計に関するさまざまなコンクール、展示会が全国で実施されているがその体系的なアーカイブ化はおこなわれていない。よって学生たちは卒業設計に取り組む際、バラバラに散逸した情報の収集から始めなければならない現状がある。30 回を目前に迎えた 2019 年頃から当委員会でもこれまでの成果についてまとめを行う議論が出始め、今回、コロナ禍という未曾有の事態から審査方法のリモート対応への変更、web 審査対応による詳細図面の提出、審査動画の動画配信などをきっかけに体系的にアーカイブ化されたサイト(アーカイブス)の構築を実施した。そのポイントは①できる限り多くの作品を閲覧可能にする。②継続性を意識しアーカイブ化に特化したサイトとする。③作品と共に審査講評、審査動画などを掲載し対話を重視したこれまでの方針を踏襲する。が委員会での議論から決定された。具体的には使用許諾が確実に取れている 2000 年以降の全作品集を閲覧、審査方法が変更後の 2020 年以降について審査用詳細図面の閲覧、審査動画の視聴を可能とすることとなった。

（参照 URL：https://jiatokyodesign.com ）

（１）_２　教育上の創意工夫・特徴・ポイント

○ [History & Continuation] 歴史と継続

本コンクールは 1992 年から 30 年間、毎年かかすことなく、JIA 学生デザイン実行委員会が継続して提供し続けてきた教育の場である。コンクールの実施と継続は卒業設計の質的向上に貢献してきたと言えよう。また、新型コロナウィルスによる緊急事態宣言が発出された 2020 年、2021 年も「対話」などのこれまで重視してきた教育的な工夫を守りつつ、web などの技術を生かし安全を重視した開催を行った。その時の状況を反映させながら教育的な目的を目指し学校の垣根を超えた教育の場をこれからも提供し続けることは使命だと考えている。

○ [Dialogue]：対話の重視

様々な段階、方法での対話を行うことができるように工夫を行い、出展者が対話を通して評価軸を共有することを目指している。

・１次審査において出展者は必ず審査員一人一人に直接プレゼンテーション、質疑応答をする時間が設けられており、複数回（廻ってくる審査員の分だけ）行われる。
・審査員は国内外で活躍する建築家で構成されており、社会で活躍するプロとの対話から自らの作品を見つめなおしていくように仕掛けられている。
・出展者は他の出展者と審査員との対話を見ることができるように時間配分の工夫、配置の工夫

などが行われている。積極的に周辺への参加のための仕掛けを意識している。

・建築家である実行委員が一次審査、出展者の待ち時間を見つけ、積極的にリハーサルと称して声がけを行い、対話を実行している。審査員以外の対話を活発化させることで様々な段階での対話が行われることを期待している。(2016 年からはシステム化。委員会奨励賞を設置)

・出展者同士の対話の啓蒙を行っている。

・最終審査でも必要に応じて出展者と直接、質疑などの対話を行いながら審査を進めている。

・終了後、懇親会を実施。出展者が審査員と直接話せるように委員がつなぎ役を行うなど積極的な対話の啓蒙を行い、インフォーマルラーニングの場を設定している。

○ [Openness & Equality]：透明性と公開性

本活動の基本となる考え方であり、コンクールの実施、アーカイブ化の基礎となっている。

・本コンクールは東京都にある大学・専門学校で 4 年制課程を持つ建築系学科の全てに参加の啓蒙を行い、近年では 30 を超える学校が参加。学校の垣根を越えた学習機会となっている。

・審査は全て公開で行われている。(1996 年から審査経過、投票結果の作品集での公表。2003 年からは公開審査会を開催。) どのようにして評価されたかを公開することで評価軸を共有する為の基礎となって寄与している。

○ [First]：卒業設計に関する初の体系的デジタルアーカイブ化

この取り組みは卒業設計について初の体系的なデジタルアーカイブ化の取り組みである。参加校は自由に閲覧できる様にパスワードを発行し連絡しており、学校での教育活動において教材、資料として寄与するように考えられている。

○ [fullness]：充実したアーカイブス

本アーカイブスには 2000 年以降の全ての作品、1083 作品が収録されている 22 年分の作品集を web サイト上で閲覧可能である。また、2020 年からは審査用詳細図面、審査動画を掲載。合わせて閲覧することで審査会を擬似体験できるような工夫を行なった。

○ [Record of dialogue]：対話をアーカイブ化する試み

アーカイブスには審査経過、審査講評が全て掲載されており、22 年で延べ 110 名の審査員による講評と審査経過、作品を合わせて閲覧することでその時、その審査員の評価軸を共有しようという教材、資料を目指している。また、2020 年からは審査用詳細図面、審査動画を掲載しており、一歩進んだ形での対話をアーカイブ化する取り組みに挑戦している。

（1）_3　教育活動の周知の状況

本取り組みは 30 年にわたる間に以下のような教育としての周知、影響を持っていると考えられる。

○ [Paticipation]：参加者の輩出による教育活動の周知

この取り組みに参加した出展者は 30 年間で延べ 1485 名。多くの参加者が様々な場で活躍している。近年では JIA 正会員の建築家として活躍する方も出てきている。

○ [Output]：教育活動の広がり

1996 年から 26 年間にわたり作品集を発行。(1996 年発行時に 1992 年から 5 年分の入賞作品を収録) 26 年間で延べ 1 万 8000 冊以上が発行され、掲載された作品は 1285 作品にも及ぶ。発行された作品集は毎年、参加大学に配布され、卒業設計の為の参考資料となることを意図している。また、2018 年にはこれまで全ての作品集を掲載した合本版を関係大学図書館に寄贈を行った。

2020 年からは審査会のライブ配信、動画配信を開始。2020 年の 1 年間の審査動画の視聴は 5,000 再生を越え、これまで以上に多くの方に見ていただく機会を提供した。

○ [Supportive] 小さな善意が集まり支える運営　―瓦寄進的発想に支えられたみんなの輪―

本コンクールの運営は一つの大きなスポンサーにより支えられているのではなく、一口 5,000 円からの事業協力や各参加校の参加費により支えられている。事業協力はこれまで延べ 149 の建築家、建築設計事務所などの協力を得ており、本コンクールに賛同している多くの小さな善意に支

えられている。いわば現代版の瓦寄進的発想に支えられたみんなの輪である。また、この輪の繋がりはこの活動の支援の広がりとも言える。瓦寄進的発想により支えられているみんなの輪が広がっていくことで更なる教育的な広がりにも繋がっていければと考えている。

（１）_４　教育の効果

建築家の職能団体である JIA 関東甲信越支部学生デザイン実行委員会が 30 年にわたり実施してきた東京都学生卒業設計コンクールとその体系的なデジタルアーカイブ化によって次のような教育上の効果があると考えている。また、これを補強する資料としてデジタルアーカイブ化を手がけ始めた 2020、2021 年の出展者、担当教員、全員を対象としたアンケート調査を実施した。(2021 年日本建築学会教育シンポジウム投稿中の論文を補足資料に添付。合わせて参照していただきたい。)

〇対話を通じて評価軸を共有し建築家に必要な暗黙知の育成を行うことで出展者の成長に貢献。

・様々な段階、形式での対話を行うことで出展者の深い学習を促す工夫が行われている。

・審査や評価の透明性を高めることで評価軸の理解を進めている。

〇卒業設計初の体系的デジタルアーカイブ化（アーカイブス）による卒業設計の教材・資料の提供。

・数多くの卒業設計作品を閲覧可能。卒業設計における資料、教材として活用の教育効果。

・単に作品を閲覧できるだけでなく、対話や講評を通じて評価軸を理解できるようになっており、その作品の深い意味や社会的な位置付けなどを考えるきっかけとなる。

・作品とともに評価軸まで記録した本アーカイブスはその時代、社会をあらわした都市・建築に対する考え方の記録である。これらは教育者にとっても教育を考える上での貴重な資料である。

〇本活動により学校での教育のまとめである卒業設計の振り返りが行われ建築家へ熟達していくサイクルの一部を担うことでおこる教育効果

・出展者の多くがコンクールに自らの成長を感じており、その成長を感じた点としてよい振り返りの機会であったと感じている。

・学校の講評会での選抜など、一つの目的として利用されていると聞いており、自然発生的に学校との教育的な連携が行われている。

〇様々な人との交流の場としての教育効果

・審査員である建築家、実行委員、出展者同士など、世代を超えた交流をする貴重な機会である。

・普段教育に携わることがない実務者にとって間接的にでも教育に携わることができる貴重な機会である。

（１）_５　未来へ　今後に向けた活動について

本取り組みは今後も継続的に取り組むことが建築家教育において重要であると考えている。アンケート調査などを踏まえて今後、取り組むべき課題、目標などをまとめた。

〇40 年の節目を目指し、これまで大切にしてきた教育的な目的を反映させたコンクール運営とアーカイブ化の取り組みを継続していく。

〇コンクールとアーカイブスの継続がもたらす相乗効果とその積極的利用を行う。

〇アーカイブスに関してキーワードによる検索機能の追加などさらなる充実を行う。

〇学校、学会、職能団体の垣根を越えた卒業設計教育の連携の強化を行い、卒業設計を通じた建築家教育の貢献を積極的に行う。

〇特に学校と専門家（建築家）との一歩進んだつながりを作りプロフェッショナル教育に貢献する。

（２）候補者と候補業績との関係

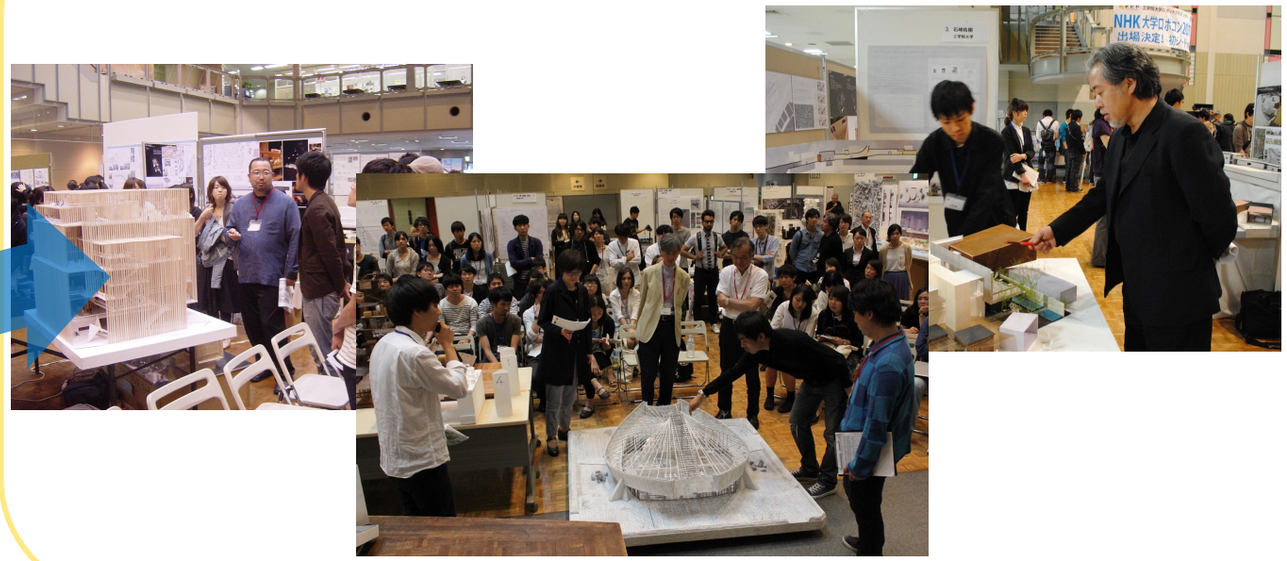
この活動は多くの出展者、実行委員、参加校、事業協力などに支えられた活動である。松村、杉山、鈴木、石原、村山の 5 名は実行委員長として本取り組みの理念を継承しその時代に合わせた取り組みとして主導的な立場で活動を行った。また、現在も委員、WG として積極的に取り組みに参加しており、特にアーカイブ化に当たっては中心的な役割を担った。

松村　哲志、杉山　英知、鈴木　隆、石原　智也、村山　隆司

独自性と教育的アプローチ

○デザインレビューによる建築家教育への貢献

対話を通して評価軸を共有



暗黙知の育成
　総合力/統合力
　デザイン能力

自分なりの
考え方・
評価軸づくり

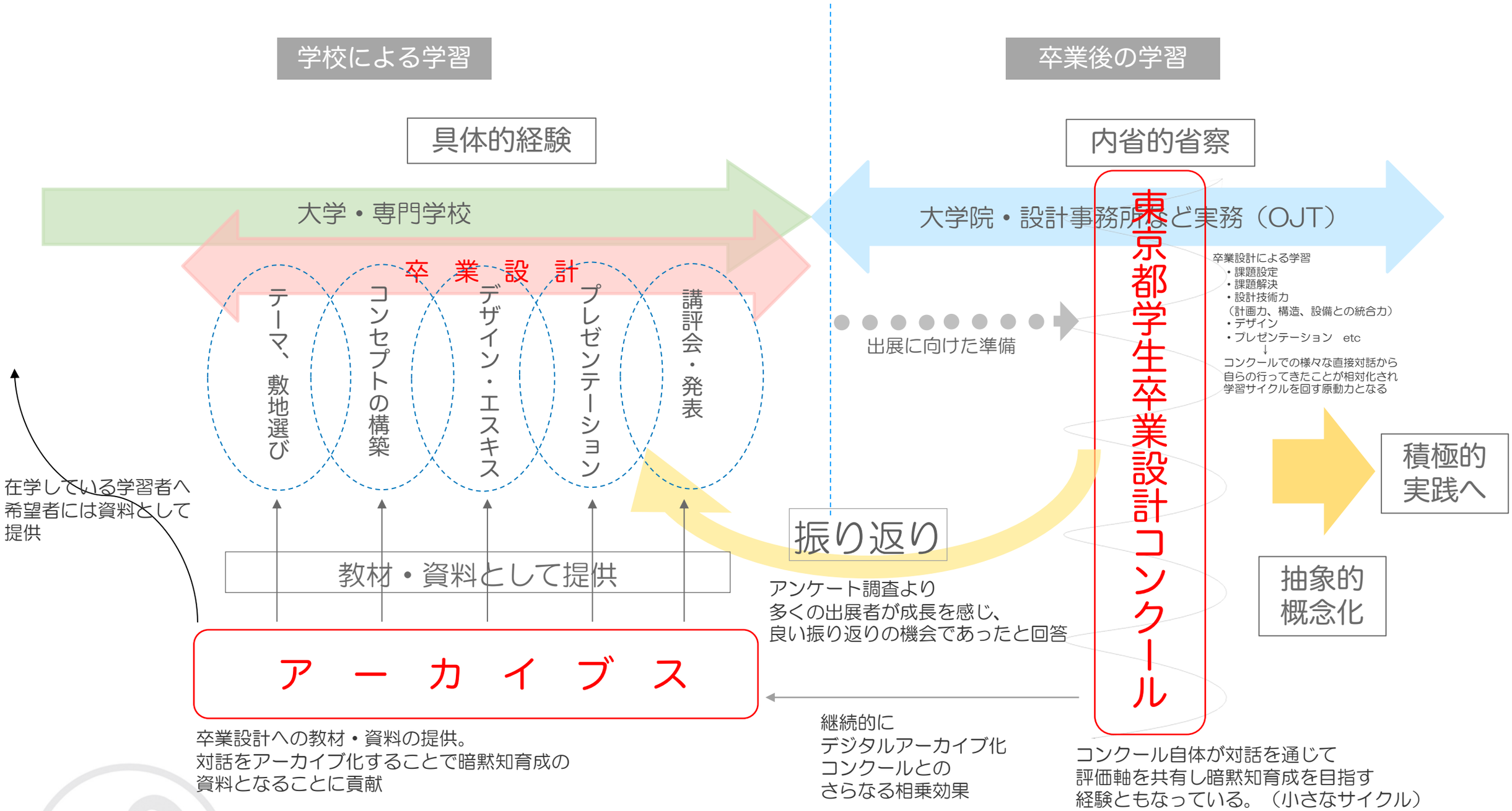
○デジタル技術を用いたアーカイブ化による教育的資料の提供による貢献

初のデジタルアーカイブ化

innovation

対話も含めて
アーカイブ化

教育的資料の提供

[熟達化に向けた卒業設計の経験学習サイクル]（大きな学習サイクル）

※これまでの運営経験やアンケート調査などから本委員会で考えるモデルである。